

トヨタ財団  
広報誌[ジョイント]  
April 2020

# LINE

No.33 【特集】  
助成対象者との対話

トヨタ財団の公募プログラムは、国内助成、研究助成、国際助成の3つのプログラムを柱として運営されています。新年度のスタートにあたり、今号ではこの3つの助成プログラムのそれぞれから対象者へのインタビューを実施。当財団の特色であるプログラムオフィサーとの対話を通して、活動の現状や多様な取り組み方を紹介・考察します。



**先** 見性を特徴の一つとするトヨタ財団の多彩な助成事業は、その時々々の状況に応じて不断に変化してゆきます。この場を借りて、2020年度の主な助成事業を紹介させていただきます。まず、今年で3年目を迎える特定課題プログラムです。このプログラムは、「時代の喫緊な課題に焦点を絞り、波及効果を強め、課題解決への道筋を探る」という考え方に基づいて立ち上げられたものです。今年度は、昨年度に引き続き「先端技術と共創する新たな人間社会」「外国人材の受け入れと日本社会」という二つの重要な今日的課題について、プロジェクトの募集を行います。

次に、「国内助成プログラム」では、地域活性化と人材育成に重点を置きながら、持続可能なコミュニティの実現を目指すプロジェクトを支援します。「国際助成プログラム」については、アジア諸国の共通課題に関する相互の学びあいという枠組みは保ちつつ、テーマの絞り込みは行わないことになりました。時代の流れに敏感で良質のプロジェクトを柔軟に考察して頂けるのではないかと期待しています。

一方、「研究助成プログラム」については、今年度の公募を休止します。過去9年間にわたって掲げてきた「社会の新たな価値の創出をめざして」というテーマのエッジが失われてきたのではないかと感じるからです。長い歴史を誇る当財団の研究助成プログラムですが、圧倒的な存在感を有する日本学術振興会(JSPS)や科学技術振興機構(JST)による公的助成と比べると、残念ながら、規模の点では目立ちません。これらの大きな助成プログラムとどう差別化を図るかは大きな課題です。そこで、ここで一旦立ち止まって、当財団

## 2020年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長  
**羽田 正**

における研究助成の目的や意義をじっくりと検討していただくことにしました。次年度には新たなコンセプトに基づく研究助成プログラムを提案したいと考えています。

**今** 年度からの新たな試みが一つあります。トヨタ財団の創立記念日にあたる10月15日前後に開催を予定する「The Toyota Foundation's Day」(トヨタ財団の日)がそれです。社会の各方面の方々とお話ししていると、「トヨタ財団は極めて意義の大きな活動で、世の中ではあまり知られていませんね」という言葉を耳にすることがあります。当財団が取り組んでいるさまざまな助成活動を一人でも多くの方々に直接お伝えすべく、今年度前半はこの催しの準備に力を入れてゆきます。また、この機会を皆様方からの貴重な助言を頂く場としても活用してゆく所存です。

**昨** 今の新型コロナウイルス流行が引き起こした世界的な危機は、期せずしていくつかの現代世界の特徴を露呈させました。一つは言うまでもなくグローバル化の進展です。中国武漢に始まった感染が、瞬く間に世界的な規模に広がったことは、その雄弁な証左です。また、経済や社会の仕組みがグローバル化を条件として出来上がっていることや、ほとんどすべての社会活動は人が集まることを前提として設計されているといったことなども今回の危機であらためて明らかになったことです。

ウイルスの流行を食い止めるため、世界各国で、人の移動を制限する措置がとられています。この動きは、ヒト、モノ、情報の移動と集合を前提とする現代の経済や社会の基本的構造に対する重大な事業がある一方で、これまでの常識が覆り、時代に合わなくなった職業や業種が消えてゆくでしょう。人と人、集団と集団が取り結ぶ関係が変化し、それがひいては経済や社会の基本的構造を変えてゆくかもしれません。感染を防ぐために奨励されているテレ・ワークや在宅勤務、オンラインでの会議や講義などは、その先駆けであるように見えます。

**公** 募スケジュールの関係で、今年度は間に合いませんでしたが、来年度は国内、国際両プログラムを設計するに際して、コロナウイルス後の世界認識を組み込むことが求められるでしょう。トヨタ財団は、常に時代の変化の兆しに目を注ぎ、その時々に必要な助成プログラムを準備し提案してゆきたいと考えます。引き続き皆さまのご指導とご支援を心よりお願い申し上げます。

挑戦です。見方を変えれば、政治だけは必ずしもグローバル化してはいなかったのです。いずれにせよ、このような施策によって、国際的な移動に関わる航空機、観光などのさまざまな業界、人の集合に関わる各種イベント関連、飲食店、小売りなどの業界が、甚大な経済的損失を被っています。間接的な影響を蒙る業界は枚挙にいとまがありません。たとえば、アメリカの大学の友人によると、外国人留学生の授業料に依存する多くの大学が、経営難に陥るだろうとのこと。

今回の危機がどのような形で収束するのか、現段階ではまだ見通すことができません。しかし、はつきりしていることは、コロナウイルスの脅威が去った世界は、ウイルスが現れる以前と同じではないということです。重視される価値が変わり新しく生まれ拡大する



本格的な春の訪れを待つ大寒桜。今年はお花見まで自粛々々でしたので、せめて写真で皆さんとお花見をさせていただきます。

Photo by Yoko Niide

## CONTENTS

FIRST WORD ● 羽田 正  
2020年度によせて …… 2

インタビュー特集：助成対象者との対話

国内助成プログラム ● たいら由以子

栄養循環を作るといふ考えが、世の中を良くすることにつながる …… 5

研究助成プログラム ● 高橋佑磨

種としての人間だけでなく、さまざまな局面での多様性を …… 8

国際助成プログラム ● 阿部 恭子

共通する苦しみや悩みを共有できる人につながる …… 11

特定課題・国内助成・研究助成  
2019年度プロジェクト一覧 …… 14

2020年度 事業計画 …… 18

共催シンポジウム開催報告 ● 沖山尚美  
学びあいから共感へ  
～私たちはいかに社会と対話してきたか …… 22

山岡義典さんと語る ● 北野華子  
小児医療の中に何かレガシーを遺したい …… 24

「私」のまなざし ⑦ 江間有沙  
ゲームを通じて考える AI と社会をめぐる課題 …… 26

お茶っこ通信 第十四回 ● 加賀 道  
日本でもメープルシロップが作れます！ …… 28

トヨタ財団ジャーナル …… 29  
● 障害児の保護者を支える「かがやき手帳」を通じた支援他

# インタビュー特集 助成対象者との対話

今号の特集は「助成対象者との対話」と題し、トヨタ財団の公募プログラムの3つの柱となっている国内助成プログラム、研究助成プログラム、国際助成プログラムから助成対象者を一名ずつご紹介いたします。各プログラムの担当プログラムオフィサーが、研究や活動の現場をお訪ねしてその成果や活動にまつわるエピソード、今後の展望をお聞きしました。

今後もこのような機会を増やし、JOINT紙面やウェブサイトなどで助成対象者の皆さまをご紹介してまいります。なお、本号のインタビューの拡大版をウェブサイトに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

トヨタ財団では、1974年の財団設立以来、これまで累計8,235件の助成を行ってまいりました。この特集が、分野を限定しないトヨタ財団ならではの幅の広い助成活動をご理解いただく一助になればと思います。

## INTERVIEW 01

### 栄養循環を作るとい う考えが、世の中を良く するにつつながる

国内助成グループがお話をうかがったのは、福岡県でコンポストの普及活動をしているたいらさん。コンポストって何？誰にでもできるの？そんな疑問に現地視察を交えながらお答えいただきました。

国内助成プログラム

Yuiko Taira

## たいら由以子

特定非営利活動法人 循環生活研究所理事。  
2016年度国内助成プログラム[そだてる助成]「ローカルフードサイクリング——生ごみを野菜にかえるサービスの構築」助成対象者

聞き手 ● 比田井純也(プログラムオフィサー)

### コンポストと 野菜作りの2つの柱

——循環生活研究所の活動について教えてください。

たいら 地域内で暮らしに必要なものを循環させることを目的にスタートしました。具体的には、生ごみを堆肥にしてそれを野菜で作って食べるというサイクルを、半径2キロ単位で全国に作りたいたいというのが私たちの願いです。

——先ほど見せていただいたコミュニティガーデンが主な活動場所ですが、他には天神でもされているということですが、少しずつ活動の拠点や場所が広がっているのでしょうか。

たいら 今は大きく分けて3つのプロジェクトがあります。今日ご覧いただいたのは一般住宅タイプです。高齢者がたくさん住んでいる美和台という所では、見守りを兼ねたコンポストをしていて、天神ではビルの屋上を使って市街地・オフィス街でのサイクルをしています。この三種類を行えば、だいたいどの場所でも応用できるかなと思って検証しているところです。

——オーガニックで健康的に野菜を食べられるということであれば、ごみ問題にはあまり関心がない人でも手軽に始められるコンポストを、ちょっとやってみようかなというのはあるかもしれませんね。前回活動を拝見した時に、これなら僕にもできるかもしれないと思いました。

たいら 私には、父が病気になった時に食事





一般住宅タイプのコミュニティガーデン

療法で延命したという大きなきっかけがあったのですが、その時に私が気づいたのが、今の暮らしは昔と違っていて複雑化しているということ。じゃあ何ができるのかということに、都会の中で利用できる、楽しくて誰でも参加できる仕組みじゃないと無理だと思い、手軽さとペラングでできるところにこだわって、ダンボールのコンポストを開発しました。そこからもう一歩、今回ローカル・フード・サイクリング(以下、LFC)コンポストを開発したのですが、それプラス野菜作りという2つを柱に事業化しています。

—— **ちよつとずつ事業の形態が変わって今があるんですね。**

たいら うちの事務所って地元の人からすると忙しそう、人もいっぱい出入りしていて、秘密結社か何かと思われていたみたいなんです(笑)。全国で堆肥づくりなどの講座を開いたり、アジアで教える人を育てる事業をしていて、この6年ぐらいでローカルに戻ってきたという経緯があります。それも赤字を出しながらやってきて、それでトヨタ財団に助成金

した。父の病気をきっかけにこういうことを始めましたが、母がずつと庭作業をしていたのを知っていたので、この活動が「土」に行きつたときに母に食いついて、朝から晩まで質問攻めにしていろいろ教えてもらいました。次はコンポストの集団を調べたりもしました。そして母を誘って立ち上げたのが循環生活研究所なんです。虫が好きで、土が好き、観察するのも好きで、コンポストが好きで、知識が豊富な母が身近にいてくれたというのが大きいんです。

冊子にまとめたり組織にするのは私の方でやりました。あとは一緒にやってくれている仲間がいますが、みんなそれぞれの理由で何かのアンテナに引つかかって一緒に活動しています。これからは栄養循環をしつかり作りたいという思いがあります。栄養循環を自分で起点で作ってあげば、それはオフィスだろうと都会だろうといいかなと。それを作るっていう考えが世の中を良くするんじゃないかという感じです。ようやく世の中の方が変わってきて、賞をいただいたりもしましたが……。いや、まだ変わってはいないかな。しかし、進化はしてきていると思います。

### それぞれの地域で堆肥がまわる仕組みを

—— **生ごみが肥料になるといっちはもちろん聞いたことはありますが、何がどうなってるのかは実際よくわかりません。**  
たいら 微生物が発生して生ごみを食べてくれるのを見ると、たまに「ごめんね」といっ

を応募したという感じだったんです。ようやく少し知ってもらえるようになって、地域の方々もここでやっていることを理解してくれるようになりました。足元が結局一番最後になってしまいました。ようやくリーダーが全国に200人揃ったのでつとLFCを始められたという感じです。

### ニューヨーク体験、いっものにアンテナを立てる

—— **視察でニューヨークに行かれましたよね。日本との認識やマインドの違い、環境の違いとかいろいろあると思うのですが。**

たいら アメリカが日本よりもエコかという点、本当はそうでもない。ニューヨークでは、みんながやっているように見える仕組みになっっているんです。たとえばマルシェで堆肥を売っていて、生ごみを回収しています。そのマルシェが1か月に何十か所もマンハッタンで開催されていて、生ごみを貯めるポイントもあるんです、すごいエコに見えるんです。でも、私が行った当初は実はマルシェで売られている野菜と生ごみは全然関係なかったんです。ただ関係あるように見えるし、生ごみを集めていて、エコな人が買い物に来ているように見えたなら、これはやった方がいいかなってなるでしょう。これを真似したかったんですよ。

それにいいものに飛びつくのが早い。オシャレな人っていいものにアンテナが立っているから理解が早い。アーティストって、得てしてそういうのが早いじゃないですか。都会、気持ちになるんですよ。私が遊んでいる間にこんなに働いてたのねと。だいたい寝ている間に温度がぐつと上がったって、生命活動ってすごいなと実感します。食べ残しを入れておいたら温度が50度ぐらいに上がったりするんですよ。微生物って寿命が20〜30分から2時間ぐらいなんです。どんどん橋渡しをして、その温度の中で微生物が入れ替わってきているので、温度が低い時と高い時の微生物の種類も違います。世代交代をしながら死骸に栄養が残って、その栄養素が野菜にいきます。

微生物の死骸が栄養になって残っていくという、生命活動の集結したものがコンポストです。化学肥料と堆肥は何が違うかという点、植物に科学的に調合した薬で栄養を与えているのが化学肥料、コンポストは手づくりの料理を食べさせるイメージ。吸収率もいいし、何を食べて大きくなったかがわかるっていうのが全然違いますよね。だから野菜が美味しくないんです。よく、「これを入れても大丈夫ですか」って聞かれるんですけど、本当はそれを食べているあなたは大丈夫ですかっていうことなんです。だから、だんだんみんな考えだします。食べて捨てるものをコンポストに入れるだけでいい。

コンポストに偏見を持っている人もいます。虫がわくとか、においがするとか、あるいは自然が好きの人がするものとか、私とは関係ないと思っている人が多い。なので、こういうおしゃれなキットで開拓しようと思っ



手前が助成金で購入したコンポスト回収用自転車

特にニューヨークは世界中からいろいろな人が集まっています。西海岸とニューヨークをずつと視察しているんですが、そう感じます。ただ、1年目は感動していたのですが、2、3年目からなんかちよつと自分にも腹が立ってきて。私たちは農耕民族じゃなかったっけみたいな(笑)。日本の方が絶対に土に近いのに、なんで負けているのと思って、LFCにますます力を入れるようになりました。

—— **LFCコンポストのバッグはともオシャレですが、どなたがデザインされたのですか。**

たいら マークは福岡在住のデザイナー梶原道生さんが作ってくださいました。バッグのデザインは、私を中心としたボードレスジャンパンのメンバーです。素材は廃ペットボトルと廃プラスチックです。

—— **元々デザインが専門なのですか。**

たいら 絵描きになりました。時期はあるんですけど、大学では栄養学を学びました。仕事は証券会社に就職していました。農業は庭仕事が好きだった母に教えてもらいま

—— **たしかに堆肥になった土の使い道が都会だとなかなか難しいのと、虫においほどうしても気になりますね。**

たいら なので、コンポストを回収する事業をしたんですよ。マルシェが大体2キロ範囲であるので、マルシェ単位で回収しようと思っっています。LFCファーマーというのを募集し、その堆肥を使ってくれる生産者と提携して、回収してもらう仕組みを作りたいんです。そうしたら地域で野菜が育って、マルシェって基本的には近所の人があるから、その地域の栄養が循環する。

この堆肥を使っている人の野菜を目的に来る人が増えるので、農家さんにとってもいいことだし、消費者はコンポストをやることによって、自分の好きな農家さんを見つけることへも意識が向きますよね。そうすると生産者も頑張ると思うんです。そういう好循環が生まれますよね。このお試しキットは販売し始めたら50%以上は東京の方が購入してくださいました。だからニーズがあるというのは分かっていたので、早くやらなきゃと思っています。



お試し用コンポスト(購入に関する詳細は31ページ参照)

助成金による成果として、今後の活動はそういうことをしていきたいですね。それぞれの地域でまわる仕組みを作りたいのです。



## 種としての人間だけでなく、さまざまな局面での多様性を

研究助成グループは、ハエを用いたユニークな研究をされている高橋先生をご紹介します。生物界における「多様性」の意義について興味深いお話をうかがうことができました。

研究助成プログラム

Yuma Takahashi

### 高橋 佑磨

千葉大学大学院理学研究院特任助教。2017年度研究助成プログラム「集団内の個性や多様性の機能——モデル生物と生態ビッグデータを用いた検証——」助成対象者。

聞き手 ● 寺崎陽子(プログラムオフィサー)  
● 加藤慶子(プログラムオフィサー)

リッチでない方が多様性はいい方に働く？

——研究が順調に進んでいるとお聞きしましたが、改めて現状を教えてくださいませんか。

高橋 私の研究は、種内の多様性や個性が集団に対して、あるいは種に対してどんな影響をもたらすのか、場合によっては悪い影響があるのかというのを調べるのが目的です。並行してやっていることが大きく分けて2つあります。1つはビッグデータという既存のデータベースを使って行う解析。それについてはすでに論文として出版されています。種内にいろいろな個性があると種の分布域が広がる、つまり南から北まで幅広くなるとか、あるいは低い土地から高い土地まで幅広くいるということがわかってきました。あるいは絶滅しなくなるといったこともわかってきました。いろんな生き物、昆虫や爬虫類、両生類や鳥なども調べていますが、いずれも同じようなパターンが出てきます。

もう1つは、実際の生き物を使った実験生態学的な研究です。なぜ多様性があると繁栄するのかということをやショウジョウバエを使って研究しています。

——ハエを研究の対象に選ばれたのはどうしてですか。

高橋 飼育がすごく楽で実験しやすいからです。1世代が1週間から2週間くらいなので、1か月も実験すればだいたいわかります。

——種内に多様性があると繁栄するとのことですが、逆にネガティブなこともあるのでしょうか。

い方がいいという場合も当然あるわけです。ケースバイケースなわけですね。

少数派がおもしろいとか価値があるといわれる社会

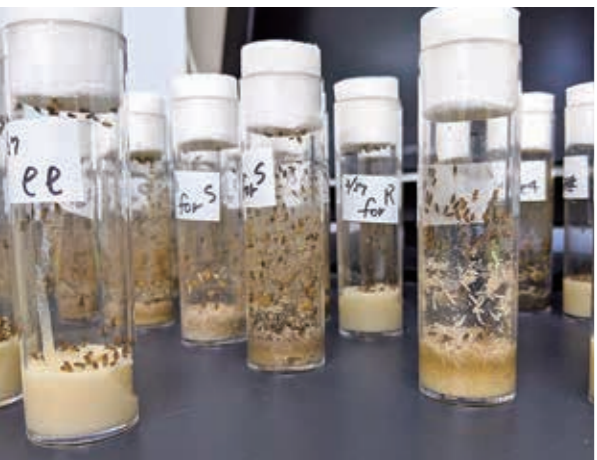
——ハエの研究から人間の多様性に結びつけて考えられる先生の着想が、すごく興味深いなと思います。ダイバーシティを研究するのに、ハエを使ってとかビッグデータを使っているというのは、どういう風につながっているんですか。

高橋 もともと多様性がどのように進化してくるのかという研究をしてきたんです。

——それは人間に限ってですか、それとも生物全体ですか。

高橋 生物全体が同じルールであると信じて研究をしてきて、実際にはトンボを使って研究してきました。そこで少数派が有利になるような状況になると、多様性が維持されるということが、考えれば当たり前ですけれども、そういうことが実験的にもわかってきました。つまり、その集団の中で多数派よりも少数派が活躍できるということですね。あるいは評価されるというか。

それで、そこからもう一歩先にいこうと思った時に、そうやってできた多様性ってどんな意味があるのかということに興味が出てきました。私自身も少数派になりたいと思って生きてきたタイプで、人とは違うことを意識したりしますし、実際に人と違うなと思いつながりました。それで多様性への進化に興味を持ち、多様性の意味とはなんだろう



特徴の違うハエを瓶ごとに分けて飼育している

しょうか。

高橋 ネガティブな面もあります。栄養を与えすぎるとケンカが増えて、多様性がない方の種が繁栄するということが実験からわかりました。それはエサの量というより内容に左右され、エサに溶かす砂糖の量やたんぱく質の量を増やすとそうなります。ただ自然界は厳しい状況なので栄養はそんなにリッチではないことの方が多いですから、多様性はいいい方に働くことが多いのかなと思っています。

——競争の原理が厳しい時に、多様性があるほうが争いはないことの原因はなんでしょうか。

高橋 理由は全くわかりません。ただほかのハエに会った時に近づかなくなります。つまり多様性があったほうが競争しなくなるんですね。エサが少ないと、誰かが近くにいとケンカになるから、お互いに離れて食べたいだろうと思うんですけども、そういう状況

になるとお互い干渉し合わずに、みんなエサをたくさん食べるということになります。

——逆に栄養がある状態になると、お互いに近づいてケンカになりやすいのですか。

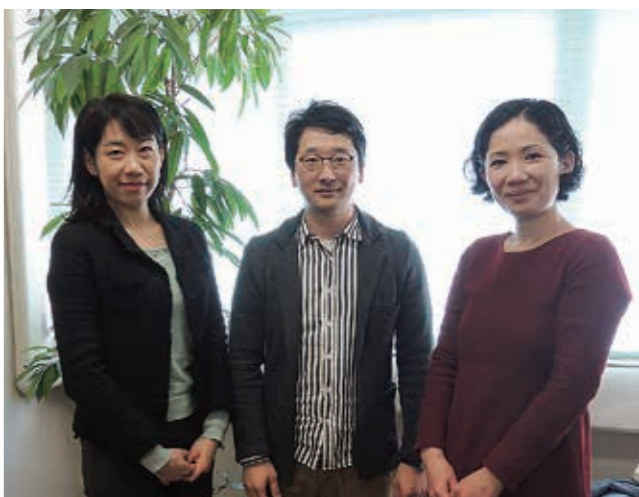
高橋 そうなんです。なぜそうなるのかはわからないのですが。そうする必要はないと思うんですけどね。ヒトもそうですが、それぞれの個体は、集団としてベストになるように動いているわけではないので。

——人間でいうと欲が出るということですかね。

高橋 そうかもしれません。悪い方に働くというのは結構稀というか、今までは、エサがリッチになると多様性があってもなくてもどうでもよくなるといわれていて、それはわかるんです。たしかにみんなハッピーなので別に何も起きないと想像できます。でも今回の研究では、それが悪い方に働くという結果が出ました。それが結構おもしろいので、掘り下げていきたいと思っています。

——ある意味哲学的で、人間にもあてはめられそうな気がしますね。

高橋 そうですね。結論からいうと、人間でも多様性がない方がパフォーマンスが上がる場面もあるかもしれません。一般的には多様性があった方がいいといわれていますし、気持ち的にもそうであってほしいと思うんですけども、たとえばある問題を解決しようとした時に、多様性があった方がいろんな意見が出ていい場合もあります。ですが、すごく専門的な作業を淡々とこなさなければならぬようなときには専門外の人はむしろいな



うかという道に進んだということです。

—— 少数派でいるとやはり生きにくかったり、他者と摩擦が起きたりして、いいことばかりではない気もするのですが、そのあたりはどうですか。

高橋 そうならなくなればいいとは思っていますけれど、ハエでわかつたおもしろいことというのは、栄養が少ない状況って実は少数派が有利な状況なんです。栄養が多い状況は少数派が不利な状況、つまり多様性に寛容なのが低栄養な状態、多様性を排除しようとするのが高栄養な状態なんです。

自分がマイノリティにいるときに窮屈に感じるのは、栄養が多い状況と同じということですね。もしそういう状況がヒトの中にあるとすると、たぶん多様性を活かしていない、むしろマイナスに働いている状況に一致するのかなと私は思っています。だから少数派であることに自分が価値を見いだせたり、あ

人は少数派だからおもしろいとか価値があるって他人が思える状況、つまりハエという栄養が少ないような状況、そういう社会を作ることができれば、多様性が必然的に生きてくると思っています。

### ある程度多様な方が その一個上が安定する

——「少数派が有利に働くチームである多様性がうまく発揮される」と助成の申請書でも述べられていて、人間に置き換えてみると確かにそうなのかなと思うのですが、その少数派と呼ばれる人たちにパワーがない状態だと、多様性がうまく機能しないわけですか。

高橋 パワーがあるかないかというよりも、周りからちゃんと評価されているということが大切なのだと思います。少数派の意見というのは、必然的に貴重な意見です。貴重な意見が正当に評価されるなら、少数派が活躍することができるとは思います。そうならば、多様性がうまく全体の活力に変わっていくのだと思っています。

生物の場合は、少数派がもととあるのではなくて、少数派が有利になれる状況があるから、多様性が進化すると考えるほうが自然です。多様性が進化すると、少数派と認識されるようなタイプも出てくるわけです。ちなみに、ハエの場合は少数派は他個体とケンカをしにくいことが今回の解析でわかったんです。無駄なケンカをしないので、すくすく育つ、つまり、多数派よりも存在意義が大きくなるのです。

制度や意識を変えると、多様性をピークのところに持ってこられると思うんですね。つまり多様性をちょうどよくコントロールしたいと思うのではなく、多様性を受け入れて多様性を最大限活かすような環境を作ってあげることですね。ハエの場合はある多様性があったときに、エサの量をコントロールしてあげればいいわけです。

—— 研究助成から派生した「先端技術と共創する新たな人間社会」という特定課題の助成プログラムを担当しており、「人間中心社会における情報技術の統制」のような話を聞くところがあるのですが、そこに自然の余剰地がなく、社会の流れと種のつながりみたいなものが断絶しているような感じを受けてしまうことがあります。なので先生のような研究があることで、そういった危機感などを喚起できるのではないかなと思うんですけども。

高橋 それも多様性ということですね。種としての人間だけではなくて、さまざまな局面で多様性があったほうがいいと思います。多様性っていろんな階層であって、たとえば人間の細胞も目の細胞があったり内臓の細胞があったりするわけです。そういう細胞の多様性があるから、体として多機能になるわけで、さらに個体の多様性もあって、もう一個階層をあげると種の多様性もあるわけです。

ある程度多様な方がその一個上が安定するんですよ。個体が多様だと集団が安定しますし、集団がいつぱいあると生態系が安定します。生態系が多様だと地球全体が安定する。そういうことが重要だと思います。

## INTERVIEW 3

# 共通する苦しみや悩みを共有できる人をつながる

マイノリティと呼ばれる人々のなかで、家族が犯罪加害者になってしまった人たちに焦点をあて、ケアを重視した支援活動をされてきた阿部さん。活動のきっかけや今後の展望などをお聞きしました。

国際助成プログラム

Kyoko Abe

## 阿部恭子

特定非営利活動法人 ワールドオープンハート代表。2016年度国際助成プログラム「アジアにおける加害者家族の現状と支援に関する共同研究——日本、韓国、台湾を中心として——」助成対象者

聞き手 ● 利根英夫(プログラムオフィサー)

### ケア型人権団体としての活動への取り組み

—— 事業の内容と、いつに至るまでの経緯を教えてください。

阿部 加害者家族について取り組み始めたのは2008年12月からです。ワールドオープンハートは、東北大学大学院在学中から法学研究科の同級生とともに、人権に関する勉強会としてスタートしています。当時は現在のような活動は全く予想してなくて、アドボカシー活動が中心というイメージでした。具体的な計画は立たないまま、日本のマイノリティの中で、支援が行き届いていないマイノリティはどのような人々かを調査していました。

マイノリティの人の中には差別やいじめを経験している人も沢山います。傷が癒えていないから、人権活動組織内でも互いに傷つけ合ったり中傷したり、ちよつと攻撃的な活動の形になったりすることもあります。そのやり方だとちゃんとした市民権を得られないんじゃないかと思つたこともありました。みんな傷ついているから自分の加害性に気づかないんですね。でも、それだと社会全体の調和としておかしいし、人権ってマイノリティの特権ではなくてみんなに等しくあるのだから、やはりそこをもうちよつと考えていかなきゃいけないよね、というところで理論的に詰めたというのと、あとはケアも重視した人権団体を自分で作りたいという思いがあったので、大学院に行きました。



——ケアの要素も入れたいというのは、サービスも提供するということですか。

阿部 加害者家族の会にはそういうケアの要素があるんですけども、アドボカシーだけではなくてケアも重視したいと、私は法学研究科にいたのですが、心理学も勉強した時期があつて、社会運動だけではないところにも関心がありました。私はケア型の人権団体と言っているんですけど、そういう団体を作りたいうことでワールドオープンハートを立ち上げたのです。

——トヨタ財団からの最初の助成は研究助成で2012年でしたね。国内の調査をするということでしたが。

阿部 トヨタ財団の助成金は私たちの活動の全国化への第一歩でした。当初は活動の規模を想定せずにやっていましたけれども、行政としては加害者家族まで手が回らないという状況のなかで、やはり私たちがそれをやらなうといけないということが、2008年からの数年間でわかりました。

田舎と都市部ではずいぶん加害者家族の置かれる現状が違うというのも、その辺で気づきはじめました。

## 日本における加害者家族支援の特徴

——田舎と都市部の違いというのは具体的にどういったところですか。

阿部 都市部には社会資源があるので、プライバシーを隠すのが容易なんですよ。転居や転職の選択肢が多い。これが地方にはない

上の加害者家族支援を経験し、「交通事故加害者家族」や「加害者家族の子ども支援」など罪名や続柄ごとに加害者家族の状況を分析してきました。地域も全国偏りなく相談者が集まっているので「日本の加害者家族支援」と表現しても良いと思います。

一方で、諸外国ではほんとうにさまざまな活動があり、いろいろなところから発信されていて、情報は集中していません。日本では珍しい活動なのでメディアも度々取り上げられました。まさに、ムーブメントの最中なのだと思います。

アジアの中でこの2国に絞った理由は、被疑者・被告人・受刑者といういわゆる「加害者」の人権が確立し、被害者の人権も確立されたという歴史を経ているからです。日本



成果物として発行された書籍。韓国と台湾で翻訳版も出版されている

ので、相談を受けたときには、もし引越すとしたら都市に出た方がいいと助言しています。田舎の方がのんびりしているようなイメージがあるんですけど逆で、プライバシーが丸裸になるので排除されたり噂が広まるリスクもあります。排除されなくても、全部人に知られている状態というのはあまり気持ちのいいものではないので、かなり生きづらいですね。それにまず仕事が無かったり、交通の便が悪いというのがありますし、あとは専門の病院がないとか。たとえば今性犯罪の治療機関が増えていて、東京だと専門のクリニックがありますが、そうした資源が都市部に偏っていて、地方だといろんな意味で暮らしていくには、田舎の方だと、加害者家族は完全に引きこもってしまいますね。いろんな事件を見ていくと、事件を起こした人の家族も考え方が狭かったりするので。まさに男尊女卑じゃないですけども、いまだに男の子は過度な期待をされていると感じます。正社員になつて働き、妻子を持たないと男じゃないみたいな。今そういうのって決して当たり前じゃない。現代とは価値観が違うという認識は、狭い地域にももっているのではなく、いろんな人がいるところに出てきて知る必要があると思うんですね。多分複合的な問題が加害者の家庭の中にあるので、オープンではなくてもいいから、地方でもいろんな悩みのネットワークがいつばいできていくことがいいと思っています。

——他にも実践で得た知見はありますか。

で、加害者家族支援が注目されるようになったのも、被害者支援が既に確立されているという点が大きいと思います。被害者支援がない状態であれば、順番が違うんじゃないかという話になったはず。その問題は今でも出るくらいですから。加害者本人の支援や被害者支援との関係にも着目し、加害者家族支援の立ち位置を比較してみることが面白いと思えました。

## 人間って何かにコミットしないと生きていけない

——東アジアとは文化的な考え方、良い面も悪い面も、家族の責任のあり方なども含めて近くて、歴史的に被害者支援ができてからというところ、司法制度もお互い意識しながら取り入れるところは取り入れるというところがあつて、たぶんちょっとずつステージは違いますが、基本的な方向性としてはなんとなく似ているという感じなのでしょうか。

阿部 これは私の意見ですが、共通する苦しみ、生きづらさって国を超えてあると思うんです。けれども必要なサポートは、その国の司法制度によるんじゃないかなと思つていて。面会できるかできないかとか、そういうところで違ってくると思うんですね。だから、やはりその国の人が細かなニーズを拾って見ていかないとわからないんじゃないかなと思います。

人間って何かのコミュニティというか何かにコミットしてないと生きていけないと思うので、引きこもりの会と依存症の会に入っ

阿部 たとえば、私は今〇〇県でこういう状況にあつて、これから裁判があるので付き添いをお願いできませんかといった相談があつて、現地の地方裁判所の状況を見ることがありました。東京地裁などは広いので、被害者と加害者が会わないようなセッティングができるのですが、地方の小さな裁判所だと待合室も小さいし、周りに喫茶店のような場所もなく、被害者と加害者が顔を突き合わせることもなつてしまう状況があることがわかりました。それは行つてみて初めてわかったことです。それに地方は弁護士も少なかったりします。

——全体的に距離が近いんですね。警察もそうでしょうし、裁判官、弁護士も地域が狭ければ狭いほどみんな顔見知りみたいな。

阿部 その場に行く、その空気がリアルになつてきますね。

——海外の事例としてアメリカを主に調査・比較されてきましたが、2016年度には研究助成からつながつて国際助成で助成を受けられましたね。今度は韓国と台湾に焦点を当てて活動をされたわけですが、相互交流を通じて何がわかりましたか。

阿部 日本の加害者家族支援の特徴は、捜査段階から加害者が刑務所を出所するまでの長期的・包括的なサポート体制です。専門分野においては法律家の存在感が大きいと思います。犯罪が少ない日本において、加害者家族支援団体の数も少なく、日本の加害者家族の情報一つの団体に集中してきました。ワールドオープンハートはこれまで1500件以

ていますとか、問題ごとのコミュニティが沢山あるといいかなと思います。仙台だと仙台市民活動サポートセンターに行くと、そういう情報が沢山あるので、地元でつながれる感じがするんですね。ああいうのが理想かなと思います。地域についていくくりでも同じ土地で生まれた絆とかじゃなくて、同じ悩みを共有できる人でつながれば一番いいんじゃないかなと思うんですけどね。

——難しいですね、近い人じゃないとサポートできないという点もある部分ではあると思うのですが、知られたくないからよその人がいい、でもそうすると状況がよくわからなかったりとか。

阿部 加害者家族は、これまで存在しないことにされてきた気がするんですね。地方だと特に可視化されていないというか。でもそういう人が必ず存在すると発信していくことが重要ですよ。

これから、犯罪に巻き込まれた人を支援するというチームを作ろうかなと思つてます。加害者と被害者を分断せずに、「犯罪に巻き込まれた人たち」でくくるという試みです。日本の場合は家族間の事件が多いので、犯罪に巻き込まれた子どもというような視点から再犯防止や、家族関係の修復というのを一緒にやっていこうという流れで、被害者支援をしてきた人々とも一緒にそれを立ち上げようという動きをしています。

## 国内助成プログラム[しらべる助成]

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
ホルヘ・アルマザン	農園のコミュニティガーデンとしての活用可能性 —南足柄におけるアクションリサーチ	100	神奈川県
福元 知晶	離島のおもしろい放課後創造プロジェクト —屋久島を教育の先進地に！	100	鹿児島県
蔭山 孝夫	湖東三山地域の地域資源と地域間連携可能性の調査・発掘プロジェクト	100	滋賀県
高坂 朝人	非行少年の立ち直りを阻む壁 —行先がなくて少年院を出院できない子どもたち	100	愛知県
阿部 真紀	子どもの権利をキーワードに世代を超えて繋がるコミュニティを「かわさき」で実現する	100	神奈川県
神田 浩史	揖斐川流域春日地域におけるコミュニティ持続のためのなりわいづくり調査事業	100	岐阜県
小野本 道治	困難を抱える若者の課題解決のための体制作り —何度でもやり直せる共助社会をめざして	100	福岡県
岡川 絵美	スタディツアー開催に向けてのニーズ及び意識調査	100	鳥取県
武政 祐	“未来のバトン”プロジェクト —横浜を支えてきた大人たちから、中学生の君たちへ	100	神奈川県
荒井 宏明	北海道の学校図書館に関する地域包括調査	100	北海道
立川 淳	塩江町歴史資料館再建事業 —変化し続ける、「生存の技法」資料館	100	香川県
辻岡 秀夫	ひきこもり状態の若者が地域課題の解決を行う仕組みを作る為の事前調査	100	東京都
鎌田 洋平	若者向け環八郎湖環境学習プログラムの普及可能性に関する調査	100	秋田県
星野 恵美子	みんなで作るみどりの板室街道プロジェクト	100	栃木県
塩根 仁	住民参加型調査から始める多様な住民間の緩やかな関係づくり	98	大阪府
鈴木 玲子	次世代を担う人材創出 —地域全体でつくる学びの場が未来をひらく	100	静岡県

## 国内助成プログラム[そだてる助成]

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
楊 焱	ご近所の力を活かして、外国人住民とのフレンドリーな輪を広げよう	734	東京都
後藤 幸一郎	地域のリソースをつなぐ農福連携 —障害者雇用と多様な担い手によるユニバーサル農業	583	静岡県
新野 保路	暮らしつなげるまちづくり診療所プロジェクト	596	福井県

## 特定課題・国内助成・研究助成

# 2019年度プロジェクト一覧

2019年度に採択された特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」7件、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」7件、国内助成プログラム(しらべる助成16件、そだてる助成11件、発信・提言助成1件)、国内助成パイロットプログラム(基盤強化助成6件、調査助成1件)、研究助成プログラム12件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2020年3月19日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

### 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
高山 嘉顕	先端技術と国際関係：安全保障・経済・情報通信技術を巡る国際関係に関する課題検討とプラットフォーム形成	650
小塩 靖崇	アスリートへのメンタルヘルス支援アプリの実装による効果検証：対人サービスへの先端技術導入の利点と課題の抽出	600
岡 勇樹	デジタルアートやセンサーなどの活用による障害児・健常児が主体的に共生できる社会づくり	580
望月 茂徳	インクルーシブなデジタルメディアの開発と検証：障害のある人のための創造的な活動とリハビリテーションのデザイン	390
大庭 弘継	社会的意志決定を行うAIの要件：良質なデータセットと望ましいアウトプットの研究	610
田口 空一郎	デジタルヘルスの普及が患者動態および医療制度に与える影響に関する研究	470
標葉 隆馬	分子ロボットロードマップ構想に向けた分野間・国際間共同研究	700

### 特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
河野 文子	日本の医療が東南アジアのイスラム圏出身者にもより良いものとなる為に — 混合研究による双方向コミュニケーション戦略と社会実装	450
山田 典子	外国人児童生徒の支援を通じて目指す多文化共生社会の調査と実践 — 文化や言語の違いを超えた情報共有と信頼しあえる地域作り	850
二文字屋 修	家族介護の国から介護保険の国へ・・・日本の高齢者介護施設等で働く外国人介護士の安定化と異文化協働の構築	650
武田 裕子	医療者への「やさしい日本語」普及を目指した地域における在住外国人参加型学習プログラムの開発と推進事業	400
土井 佳彦	官民連携による多言語相談窓口体制強化事業 — 多文化共生総合相談ワンストップセンターの持続可能な運営に向けて	900
杉田 昌平	外国人材の受け入れに関する制度に関する総合的プラットフォームの構築	750
荻野 紗由理	高度外国人就労者受入れ支援に関する産学官金の地方モデルの研究・実証活動	500



## 2019年度プロジェクト一覧

### 国内助成パイロットプログラム[調査助成] \*イニシアティブプログラム枠にて助成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
保井 美樹	地縁を活かしたコミュニティ活動団体の現状と今後の支援のあり方	300	全国

### 研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
久保 倫子	国際共同研究による持続可能な都市発展モデルの構築 —— 都市発展と縮退受容を両立する都市像の実現を目指して	660
根本 達	マイノリティとの異種協働の連帯に向けて —— 現代インドの不可触民解放運動の再考と佐々井秀嶺保存史料のデジタルアーカイブ化	350
ディニタ・セティアワットティ	周縁化された人々のエネルギーサバイバル —— ジャカルタとボゴールにおける都市インフォーマルセクターの充電スタンドに関する事例研究	120
畑中 綾子	医療ケア児の家族の「語り」によるデータベース構築 —— 家族と地域のつながりを生み出す社会的資源として	520
山口 一岩	きれいな海から豊かな海への実現戦略 —— 瀬戸内海の実現戦略と資源のマネジメント	550
石原 広恵	住民の視点から生物多様性保全を目指す —— 人と自然が共同で生み出す「関係性価値」の日米比較研究	620
曾我 昌史	自然と関わる「経験の消失スパイラル」 —— 全国スケールの実態解明と適応策の提案	580
高橋 康史	非行をした青少年に対する修学支援に関する実践的研究 —— 新しい「立ち直り」論の構築を目指して	500
森田 敦郎	気候危機と草の根インフラストラクチャーの実験 —— 経済とテクノロジーのローカル化と自律性の探求	640
諏訪 竜一	蚊媒介性感染症対策における伝統知と科学知の融合 —— おばあの知恵が高める災害後のレジリエンス	560
宮本 聡	地域コミュニティに開かれた特別支援学校についての学際的研究 —— ローカルな学習文化資源を活かしたラボラトリースクール構想	600
家子 直幸	児童福祉領域における知識仲介の研究 —— 機能のモデル化と試行的実装	300

### 国内助成プログラム[そだてる助成]

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
石井 勇	国や県の境を越え、出会いと学びのサイクルをドライブする九州ハイランドツーリズム	744	熊本県
高橋 聖子	江戸川みんなの防災プロジェクト —— 災害時、誰一人取り残さない地域へ	655	東京都
東丸 慎太郎	徳島美波地域観光開発プロジェクト	700	徳島県
猪田 有弥	村民の“動くを楽しむ”をサポートする、にしあわくらモビリティセンターの立ち上げ	740	岡山県
小見 まいこ	高校生を中心とする地域をフィールドとした「探究学習」推進プロジェクト	774	新潟県
箭野 美里	公営住宅コミュニティを支える新たな仕組みづくり —— 若者自立支援の実践を通じて	976	大阪府
中島 かおり	「にんしん」をきっかけに、孤立せず、自由で幸せに生きていける東京を創造する	961	東京都
岡元 一徳	認知症改善プログラム「農福リハビリ」の確立と新たな農福連携事業モデルの創造	720	宮崎県

### 国内助成プログラム[発信・提言助成]

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
木下 貴雄	外国人も安心して老後を暮らせる地域社会をめざして	396	愛知県

### 国内助成パイロットプログラム[基盤強化助成] \*イニシアティブプログラム枠にて助成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
秋田 史津香	「あたらしい学校応援団」で地域の力をひとつに!	83	東京都
山木 則男	多種多様な住民の参加で創り出す開かれたコミュニティの実現をめざして	100	千葉県
古山 郁	豊かな地域社会の創造に向けて人と組織が共に育つプロジェクト	100	福島県
宮口 諒	祭も地域も守るまちづくりプロジェクト —— 若者がつくるわがまちの未来	100	大阪府
長谷川 秀美	次世代まちづくりプロジェクト —— 支援される側から共に創る仲間づくり	99	大阪府
小林 博明	まちの縁側の普及と担い手を育むプロジェクトの推進	100	長野県



# 2020年度事業計画

トヨタ財団の本年度「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

当財団は、1974年の設立以来、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化等に関するさまざまな研究や事業に対して助成を行い、その際、「先見性」・「市民性」・「国際性」の3つのキーワードを軸として助成プログラムの企画立案・運営を行ってきました。

2020年度の幕開けとなる今年は、時代の喫緊な課題に焦点を絞り、波及効果を高め、課題解決への道筋を探るべく、これまでの助成プログラムにまして、「先端技術と共創する新たな人間社会」(3年目)と「外国人材の受け入れと日本社会」(2年目、助成金予算増額4千万円→5千万円)の2プログラムについては、基本的な内容を変更することなく継続。既助成対象者の中間報告会実施などの機会を捉え、公募告知

2020年度の重点実施項目として次の6点を掲げています。  
①最低3年間は継続としてスタートした特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」(3年目)と「外国人材の受け入れと日本社会」(2年目、助成金予算増額4千万円→5千万円)の2プログラムについては、基本的な内容を変更することなく継続。既助成対象者の中間報告会実施などの機会を捉え、公募告知

## 特定課題プログラム 先端技術と共創する新たな人間社会

### ●2020年度の考え方

3年目となる2020年度は、プログラム内容を変更することなく継続するとともに、前年度同様、大学・研究機関、NPO/NGOへの案内を中心に、幅広い周知活動を積極的に展開する。  
2年目までの総括を実施し、4年目以降のプログラムの扱いを検討する(ネットワーク形成支援等による深掘りや、助成分野の拡大等)。

### ●募集概要

「テーマ」  
先端技術と共創する新たな人間社会

「募集時期」  
2020年10月1日～12月(予定)

「助成予定金額」  
総額4000万円「500～1000万円程度/件」

「助成期間」

2021年4月1日から最長3年間(1年、2年または3年間)

の強化を図ります。

②国内助成プログラムについては、募集時期(9月→4～6月)と助成期間(4月→3月→10月→9月)を変更します。内容については、「しらべる助成」に「そだてる助成」の2つの枠組みで助成を行い、「発信・提言助成」は社会コミュニケーションプログラムに統合します。発展性や波及効果などを重視し、特定地域の課題解決に関するテーマに限ることなく、持続可能なコミュニティの実現に資する汎用性のあるテーマも対象とします。

③研究助成プログラムについては、2011年度以来9年間に亘り、基本テーマを「社会の新たな価値の創出をめざして」として、学際的・領域横断的な研究に対する助成を続けてきました。2020年度は、助成活動を休止してこの間の助成活動・実績の振り返りに充てることで、2021年度からの新しい基本テーマの探求を行っていきます。

④国際助成プログラムについては、これまでの基本テーマ「アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——」を継続します。但し、助成領域としては、敢えて重点領

域を定めずにオープンに公募することで、将来の特定課題となり得る領域の発掘を狙います。

⑤イニシアティブ・社会コミュニケーションの非公募プログラムについては、合計5500万円の助成金予算を充て、非営利セクターの発展に資するプロジェクトの支援や他組織との共同助成、民間財団として支援の意義が大きいと考えるプロジェクト、そして過去の助成プロジェクトの中で成果の高かったものを選び、その成果を広く社会に発信するプロジェクトなどの支援を積極的にを行います。

⑥助成プログラム以外の取組みとしては、トヨタ財団ならではの企画として高く評価いただいている「トヨタNPOカレッジ」カイクツ」の第5期の実施と、助成プログラムの枠を越えてトヨタ財団としての取組みの成果を広く財団界・助成先・大学関係者などの多くのステークホルダーに発信する「The Toyota Foundation's Day(仮称)」を、今後新たに財団設立記念日(10月15日)前後に行います(本年度は10月20日予定)。

## 特定課題プログラム 外国人材の受け入れと日本社会

### ●2020年度の考え方

助成プログラムの内容及び募集時期に関しては、初年度となった2019年度と変更はなし。  
他方、公募説明会等による公募活動に関しては、東京都内だけでなく、地方での開催も視野に入れる。また、同説明会に2019年度の助成対象プロジェクト関係者を招き、中間報告と議論の機会とする。

### ●募集概要

「テーマ」  
外国人材の受け入れと日本社会

「募集時期」  
2020年10月～11月(予定)

「助成予定金額」  
総額5000万円「500～1000万円程度/件」

「助成期間」

2021年5月から2年または3年間

## 国内助成プログラム

### ●2020年度の考え方

2021年度に国内助成、研究助成、国際助成の助成期間を秋開始に統一する計画を踏まえ、本年度より助成期間をこれまでの4月から10月開始へ変更する。

基本テーマや重点領域などは2019年度を踏襲する。また、発展性や波及効果などを重視し、特定地域の課題解決に限らず、持続可能なコミュニティの実現に資する汎用性のあるテーマのプロジェクトへの助成も選考過程で柔軟に検討する。

助成の枠組みについては、「発信・提言助成」を撤廃(社会コミュニケーションプログラムに統合)し、「しらべる助成」、「そだてる助成」の2つの枠組みで助成を行う。

今後のプログラム見直し(「しらべる助成」、「そだてる助成」を統合してプログラムを一本化、または「しらべる助成」から「そだてる助成」へのステップアップの促進、新たな重点領域の検討(追加)など)に向けて、過去の助成対象者や選考委員へのヒアリングなどを通じた検討を進める。

助成対象プロジェクトのフォローアップの充実を目的に、助成の開始段階、中間段階、完了段階においてプログラムオフィサーによる現地訪問、外部講師を招いての研修や選考委員も参加しての報告会などを実施する。

「市民の参加」を促進するための助成プログラムについては、2年度にわたりパイロット

## 研究助成プログラム

### ●2020年度の考え方

「社会の新たな価値の創出をめざして」というテーマを設定してから9年経過し、その過程でさまざまな社会的課題を取り扱ったプロジェクトを支援してきた。既存の価値にとらわれず、新たな研究の分野や手法に挑む多くのプロジェクトを支援してきたことに加え、2015年にはSDGsが採択されたことで「社会の新たな価値の創出」といったテーマがある一定の役割を終えたとも考えられる。今後はさらにその先を見据える必要があると考えられることから、2020年度は公募を一時休止し、これまでの総括を行うとともに、2021年度に向けて新しい助成テーマの検討を進めることとする。

振り返りの方法としては、アンケート調査、内部／外部専門家を交えた検討会、一般向けのシンポジウムの開催(2020年10月)、及びそれらの内容をまとめた冊子の作成とする。

### ●募集概要

本年度は募集を休止

## 国際助成プログラム

### ●2020年度の考え方

助成プログラムの基本テーマと趣旨を継続する。具体的には、日本を含む東アジアと東アジアの共通課題に対する「2国以上の地域実践者による国を越えた現場交流・課題解決」への助成を行う。

ただし、2019年度に重点領域とした「異なる国籍や文化的背景を持つ多様な人々が共に暮らす社会」は、2019年度に特定課題として新たに開始した「外国人材の受け入れと日本社会」との重複が大きいことから、2020年度は重点領域を設置しない。助成金総額は昨年度同様7000万円とする。

また、東アジアと東南アジアにおける共通課題に取り組むさまざまな人々の人脈と知見の共有を促すことで、新たな方策やそれにつながるパートナーシップが生み出されることを期待する国際助成プログラムの狙いと、助成プロジェクトにより得られた知見の共有を推進するため、報告会や交流会などのフォローアップ活動に注力する。

助成プログラムへの還元に向けた情報収集と人脈構築のため、国内外の国際会議等に対しても引き続き積極的に関わっていく。

### ●募集概要

「テーマ」

「アジアの共通課題と相互交流―学びあい

## イニシアティブプログラム

(非公募)

### ●2020年度の考え方

NPOの基盤強化や市民参加など非営利セクターの発展に資するプロジェクトに対する助成を行うとともに、他組織との共同助成、民間財団として支援の意義が大きいと考えるプロジェクトなど、本プログラムの本来の目的である、将来の新しいプログラムの開発に資するためのプロジェクトを積極的に発掘していく。

### ●プログラム内容

「対象プロジェクト」

- ・NPOの基盤強化や市民参加など非営利セクターの発展に資するプロジェクト
- ・他組織との共同助成、民間財団として支援の意義の大きいプロジェクト
- ・財団独自の調査活動や研究会と連携するプロジェクト
- ・公募プログラムにおけるモニタリングなどを通して、より大きな成果に結びつくこと財団として判断したプロジェクトなど

「助成予定金額」

総額4000万円

## 社会コミュニケーションプログラム

(非公募)

### ●2020年度の考え方

本年度も引き続き、全プログラムを対象に、助成プロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とする。具体的には、モニタリング(中間・最終段階)などを通して候補となるプロジェクトを選定し、助成対象者とPOが連携して効果的な社会への発信を図る。

書籍の出版のみならず、映像媒体(映画・ビデオ・DVD・漫画など)、デジタル媒体(ホームページ・メールマガジンなど)やシンポジウム、ワークショップ、メディアの活用など多様な方法を通じての社会発信を対象とする。

### ●プログラム内容

「対象プログラム」

全プログラム

「対象プロジェクト」

過去の助成プロジェクトの中から対象者と財団とが協議の上、候補を選定

「助成予定金額」

総額1500万円

プログラムとして助成したプロジェクトに対ししっかりとフォローを行っていく。

「トヨタNPOカレッジ」カイクツ』は、2019年度の実施を踏まえて、受講者の学びがより深まるための運営の見直しや遠方からも参加しやすい仕組みなどを検討する。

### ●募集概要

「テーマ」

未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ―地域に開かれた活力ある課題解決の仕組みを通じて―

「助成カテゴリー」

しらべる助成、そだてる助成

「募集時期」

2020年4月1日～6月8日(予定)

「助成予定金額」

総額1億円

しらべる助成…上限額100万円/件

そだてる助成…上限額設定なし

「助成期間」

しらべる助成…2020年10月1日から1年間

そだてる助成…2020年10月1日から2年間

から共感へ―」

「対象国」

東アジア・東南アジアの国や地域

・東アジア…日本、中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル

・東南アジア…ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム

「対象プロジェクト」

対象国の2国以上における、各プロジェクトテーマについてのレビュー及び提言や作品の制作

「募集時期」

2020年4月1日～6月6日

「助成予定金額」

総額7000万円「500～1000万円程度/件」

「助成期間」

2020年11月1日から1年間もしくは2年間

# 学びあいから共感へ

## 私たちはいかに社会と対話してきたか

● 冲山尚美（国際助成プログラムプログラムオフィサー）

トヨタ財団国際助成プログラムは、2020年2月7日（金）および8日（土）に、東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）」との共催シンポジウム「学びあいから共感へ」私たちがいかに社会と対話してきたか」を開催しました。1年で最も寒い時期にもかかわらず、2日間でのべ130人以上の方に足を運んでいただき、熱い対話の場とすることができました。

### 東京大学多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）との共催

国際助成プログラムは、「アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——」を主題とし、「複数国かつマルチセクターのメンバーからなるチームが、相互の直接交流を通じて立場を超えて学びあい、共通する課題について多角的・複眼的に理解を深めながら取り組み、その成果を社会に発信する」というアプローチを重視した助成を行っています。

一方、東京大学の多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）は、高い専門性を持ちながら、研究領域の枠を超えて実践的な問いを立て、社会に役立つ問題解決や価値創造を行うことのできる次世代トップリーダーを養成することを目指しています。

実践現場とアカデミアという主たる軸足の違いはありますが、2つのプログラムが目指す方向やアプローチには多くの共通点があります。今回のシンポ

ジウムでは、トヨタ財団国際助成プログラム助成対象者と東京大学IHSプログラムの研究者や学生が、「社会との対話」に焦点を当て、国や専門分野、立場の違いを超えて協働する意義や価値、難しさ、社会の関心を喚起する試み等が紹介されました。

### Day1(2/7 15:00~18:00)

#### 上映会・クロストーク…彼らの見方・切り取り方

1日目の上映会とクロストークでは、トヨタ財団国際助成プログラムの助成対象者であるディペシユ・カレル氏（対象地へ以下同じ）…ネパール、ベトナム、日本）、スイヒン・クリー氏（カンボジア、タイ、ベトナム）、ジェン・ユヒョン・イ氏（台湾、韓国）の3名が、それぞれのプロジェクトを通じて制作した映像作品を上映しました。日本に来るために渡航費や仲介料、研修代等の多額の借金を背負い、深夜にコンビニ店員や新聞配達員などとして働きな

がら、昼間は学校で学ぶベトナムやネパールの留学生の姿や、東南アジアから韓国や台湾への結婚移民の女性たちが、母親であること・移民であることをいったん脇に置き、ひとりの人間としてアートの向き合うことを通じて自分自身を取り戻していく過程など、同じ社会に生きながら知る機会の少ない「隣人」の姿と、彼らから見た社会の捉え方が映し出されました。

### Day2(2/8 10:00~12:30)

#### シンポジウム…境界の超え方・つなぎ方

2日目のシンポジウムでは、東京大学の高橋英海教授からIHSプログラムの目指すものについてお話しいただいた後、IHSで学ぶ田邊裕子さんと飯塚陽美さんから「問題解決や価値創造を通じて学びを社会に還元する試み」として、彼女たちが主導して実施した宮崎県高千穂町での町おこしイベントや、大学院を身近に感じてもらうためのイベント「はじめの学芸等」が紹介されました。続いてトヨタ財団の助成対象者である海老原周子氏（日本、香港、マレーシア）、吉川舞氏（カンボジア、日本）、ナピサー・ワイトゥンキアット氏（タイ、インドネシア）より、それぞれがトヨタ財団の助成を得て実施したプロジェクトについて紹介がありました。

続くパネルディスカッションでは、「どのように専門領域やセクター、国、立場等の違いを超えるのか、そこに「どのような」挑戦があるのか、また容易ではないにもかかわらず「なぜ」超えることを促す役割を担うのか、ということについて、登壇者それぞれが自分の経験や想いを語り合いました。「使う言葉も世界の見え方や立ち位置も違う人たちと活動するには、意図や想いを解釈して仲介する役割が

重要」「生まれる前の価値を言葉にするのは難しい。でもそこに大切なものがある、と感じる人から少しずつ行動に移していくことで変化の輪が広がる」等、経験に基づいた気づきが紹介されました。

最後にモデレーターを務めた東京大学の園田茂人教授より「登壇者それぞれが、とても魅力的である。この人間としての温かさやパワーに惹かれて、この人なら信頼できる、一緒に何かしてみたい、という周りの人々の意識変化につながるのではないか」とのコメントがありました。

### 国際助成プログラムが目指すもの

既に顕在化している問題の解決に追われるだけでは、未来の社会を主体的に創造することはできません。私たちは、問題解決の先にある新たな価値を模索し、それに向かって前進する実行力を磨き続ける必要があります。その素地を築くのは、自分とは異なる立場や考えの人々から学びあい、多角的に考え、一歩踏み出して行動してみることだと考えます。また多角的な学びあいは、二項対立ではない包摂的な社会を創ることにつながります。

今回のシンポジウムを通じてこの「学びあいを通じた問題解決や価値の創造」に最前線で挑む実践者から話を聞き、その醍醐味を垣間見ることができました。同時に「まだ形になっていない価値を社会にどう伝えるか」という難しさも、改めて考える機会となりました。

トヨタ財団国際助成プログラムでは、これからも学びあいや共感をもとにした社会との対話を探求していきます。



Day2(2月8日)：パネルディスカッション



Day2(2月8日)：会場の様子



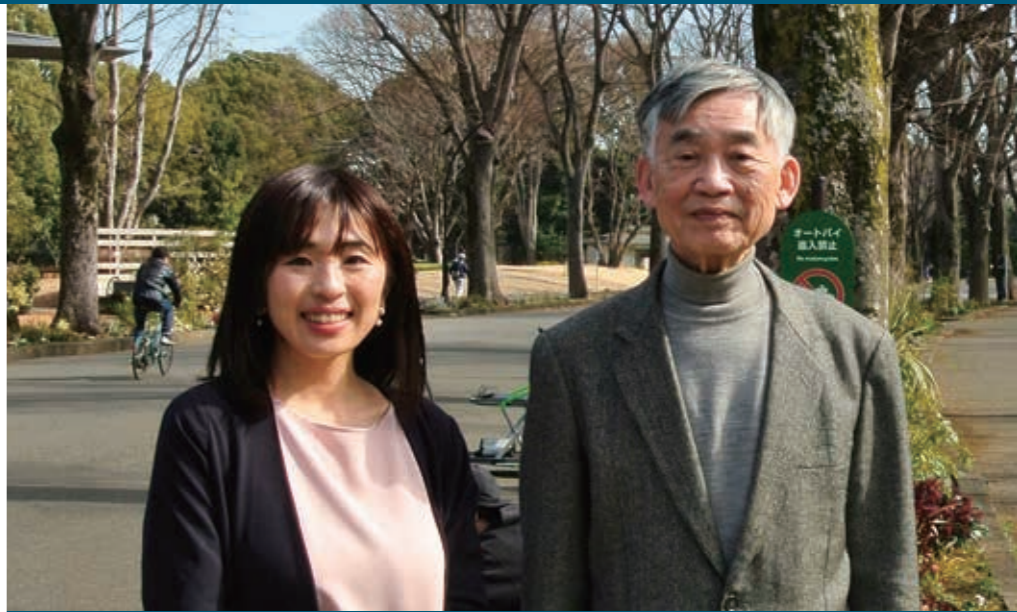
Day1(2月7日)：参加者同士の交流



Day1(2月7日)：クロストーク



Day1(2月7日)：会場の様子



山岡義典さんと語る・北野華子

## 小児医療の中に何かレガシーを遺したい

15年間の長期療養生活を送った経験をもつ北野さん。同じように長期的に治療・療養を必要とする子どもたちに、「青春」を病気で諦めさせたくないと考え、スポーツを通じた活動をはじめたという。その活動にける思いを語っていただいた。

◎ 山岡義典（やまおか・よしのり）特定非営利活動法人市民社会創造ファンド理事長、助成財団センター理事長、日本NPOセンター顧問などを務める

たのは、アメリカに行つてからです。  
**北野** 留学した動機はチャイルド・ライフ・スペシャリストという資格を取ろうと思つたからですが、アメリカに行つてみて、病院の中でスポーツ活動をやっているということに驚きました。

スポーツを活用して、体力づくりや精神的なストレスの軽減等、コミュニティ創出支援、自立支援につなげている現場を見て、2020年に際して日本でもそういった支援を取り入れたいと思つたのがきっかけです。  
**山岡** アメリカから帰つて来られて2015年に団体を立ち上げましたよね。日本に帰つたら実際にどういうことをやろうかと決めていたのでしょうか。

**北野** インタールンをしたのがアトランタのパラリンピックのレガシー団体でした。オリリンピック・パラリンピックが1996年に開催された時にできた非営利団体で、障がいスポーツやパラリンピアの育成、地域の中に障がいスポーツを普及させるプログラムをしている団体だったので、そこでインタールンをさせていただいたのです。2020年に東京オリリンピック・パラリンピックが開催されるから、そういうことについて勉強をしたかったのと、資格を取りたいという思いもありました。

日本に戻つてくる時に病院の中のスポーツ活動って今までにないものだと思つたので、そういったものを作つて病院の中にスポーツというツールが一つの支援としてできればと考えました。世の中全体の事に貢献しているわけではないのですが、小児医療の中

終わつてしまふんですけれども、これが持続可能な形になるように病院の活動も地域の活動や入団事業も、そういう仕組みを作れるように頑張つていきたいなと思つています。  
**山岡** 日本の非営利セクターはやはりまだ未熟だとかいろいろ課題もあるとか、なかなか理解してもらえないようなこともあると思いますが、それらを乗り越え、今後のさらなる活躍を期待しています。

**北野** 日本では確かに大変なところもありますが、いい部分もたくさんあるので、そこを活かしながら前進していきたいと思つています。

”長い療養生活を送る子どもたちに“  
**山岡** 今の活動はご自身の体験に基づいているんですよね。その辺のことからお話をしてください。

**北野** 活動のきっかけは、自分が子どものころ長期療養していたという経験です。私の場合は「家族性地中海熱」という病名が見つかるまで15年、同世代と同じ生活ができるよう

に何かレガシーが遺せるといいなと思つてこの活動を始めたのです。

”日本のいい部分を活かしながら“

**山岡** プロ・チームのアスリートたちとの交流もやつておられますが、アスリートにアクセスするというのはかなりハードルが高いのではないのでしょうか。

**北野** 最初の頃は知り合いや、新聞などを読んで興味のある方に直接お電話をしたり、チームにアクセスしたりしました。私たちの活動に参加する際は、長期療養中や感染症に弱い子どももいるので、抗体検査や予防接種も受けていただいています。

**山岡** そこまでやると単なる思いつきだけではなくて本物だなという感じがしますね。

**北野** スポーツの力つてもっとあると思うし、アスリートができる事つてもっとあるだろうと思つて。スポーツチームやアスリートは、子どもたちと社会を支えてくれる人を繋げるきっかけや、治療を頑張るための目標やモチ



◎ 北野華子（きたの・はなこ）

特定非営利活動法人 Being ALIVE Japan 理事長。アトランタパラリンピックレガシー団体 BlazeSport America やシンシナティ小児医療センターを経て、埼玉県立小児医療センターでチャイルド・ライフ・スペシャリストとして勤務。2017年に病院を退職して現職

ベーションの向上等にプラスになる。そういう活動ができるような機会が作れたらなと思つている。一緒にスタートしたというのがあります。  
**山岡** ボランティアも大勢いらつしやるようですね。どういうルートと、どういうやり方で募集しているんですか。  
**北野** 最近はメディアに露出させていただく機会が増えたので、ホームページから問い合わせをいただいたりします。あとはボランティア説明会の開催案内をSNSで発信すると反応があるケースが多くあります。  
**山岡** 今は東京の世田谷を拠点に活動していますが、これからはどんなことをやりたいとお考えですか。  
**北野** 東京、神奈川や関東圏内を中心に活動を展開していますが、他にも兵庫や沖縄でもやっています。山形と大阪では入団事業をさせていただいています。病院の中のスポーツ活動を全国に広めるのが目標なのですが、その中でも7病院7地域ほどしかまだカバーできていないので、全国にそれを導入できるようにしたいです。しかし、事業自体が寄付や助成金頼りになってるのが現状で、それを解消したいと思つています。アメリカだと病院を訪問したあとに、発信力のある選手たちがアドボカシーという形でこういうお子さんたちがいて支援が必要だというのを発信して、お金を集めて、それを元にまた訪問していただくという循環ができるようなシステムになつてほしいので、私たちもそれを作つていけたらなと思つています。  
今は行くだけ、活動を届けるといっただけで



山岡義典

### 「Being ALIVE Japan」を訪ねて

2月としては暖かい快晴の昼前、駒沢オリンピック公園に近いシェア・オフィスに北野さんをお訪ねした。「長期療養にある子どもたちにスポーツを」という発想は、元（当事者）としての北野さんならではのリアリティをもつ。それに自らの「専門性」も磨いてきたし、医療関係者も役員として参加する。多くの賛同者を得て（市民性）も豊かだ。子どもたちの笑顔が広がる要素が、ここにはいっぱいある。1964年のレガシーを目の前にして2020年のレガシーについてお聞きすると、思わなかったが、この活動こそ極上の文化的遺産になるに違いない。

# 監

視カメラが映した空港の映像が投影される。100人以上が表示される中、5人の顔が四角い枠でハイライトされる。あなたの役割は5人の中から「疑わしい」と思える人を選ぶこと。与えられた時間は30秒。あなたの横では人工知能(AI)のアルゴリズムも「疑わしい」人を選び出す。アルゴリズムとあなたが出した結果、果たして一致するか否か――。

これはカナダの若手アーティストたちが作ったゲームだ。顔認証システムを導入する企業のCEO役のファシリテータのもと、参加者は3グループに分かれる。(1)アルゴリズムを作るグループ、(2)アルゴリズムを実行するグループ、(3)人間グループだ。それぞれの役割は以下の通り。

(1)アルゴリズムを作るグループには、学習データとして犯罪者の写真が与えられる。そこから犯罪者の特徴を抽出してリストに書き出す。(2)アルゴリズムを実行するグループは、与えられたリストをもとに、画像の5人のうち最も条件を満たす人を選ぶ。一方、(3)人間グループには抛るべき指針は何もない。経験と勘によって疑わしいと思う人を選び出す。

# 今

回、私は「人間」グループに参加した。ゲームファシリテータによると、最も大変で辛いかもしれないという役割だ。画像ではほとんど顔が見えない人もいる。グループメンバーと相談するも、時間が無い。誰かの「ハンドサイン」が挑発的な1番じゃない?、「帽子を目深にかぶってる4

のようなハンドサイン、帽子を目深にかぶっている顔を隠している、ほかの人にケンカを売ってるなどの文脈情報から「疑わしさ」を見出そうとした。そこに人間とアルゴリズムの判断の違い、アルゴリズムによる判断の限界がある。

また、アルゴリズムだけではなく、CEOとしてのファシリテータの役割とゲームの枠組みそのものを疑うことを忘れてはならない。なぜこのシステムは「一人」しか疑わしい人を選ばないのか(複数いる可能性は想定していないのか)、なぜ機械と人間とを競わせるのか(人間をお払い箱にしたがために競わせるのではないか)。アルゴリズムを作る側ではなく、そもそもなぜ機械を、どういう条件で導入するかなどの意図も考えなくてはならない。

# ゲ

ームで現実の問題を扱うメリットは、物事の本質を体感できることだ。現在、人工知能(AI)の画像認識精度はあがり、空港やイベント会場など多くの人が集まる場所で、疑わしい人を予測するシステムも登場している。しかし、このような予測、予防的なアルゴリズムはどのくらい信頼できるのか。どのようなデータを学習させているのか。欧米では公的機関が顔認証システムを使うことに対して懐疑的だ。たとえばサンフランシスコ市は2019年11月に公共機関が顔認証システムの使用を禁止する条例を可決した。現在の顔認証技術は、学習させるために与えられたデータが人種やジェンダーの観点において偏りが

## 「私」のまなざし 27

# ゲームを通じて考える AIと社会をめぐる課題

文・写真◎江間有沙

東京大学未来ビジョン研究センター



図1. アルゴリズムグループが緑のカードを挙げているが、人間グループは赤のカードを挙げており、判断が異なっている  
本ゲームはBryan Depuy, Alex Lord, Jerrold McGrath, Heran Genene, Raad Seraj, Big JuiceのアーティストらがArt impact AI projectのために作成した。このゲームイベントはValentine Goddard氏(NGO法人AI Impact Allianceの創業者)とJerrold McGrath氏(NPO法人UKAIのジェネラルマネージャー)により2020年2月29日にバンクーバーで開催された



図2. アルゴリズム作成グループに与えられた「犯罪者」のデータと、グループが作成したアルゴリズム実行グループへの指示書

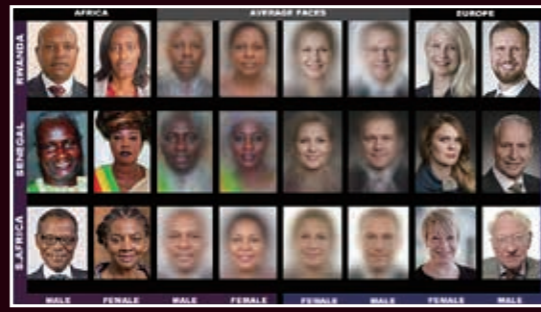


図3. MITの研究者は、既存の顔認識サービスが性別や人種によって精度が異なり、特に浅黒い肌の女性のエラー発生率が高いことを指摘した  
Buolamwini, J., and Gebru, T., Gender Shades: Intersectional Accuracy Disparities in Commercial Gender Classification, Proceedings of Machine Learning Research, 81:1-15, 2018. <http://proceedings.mlr.press/v81/buolamwini18a/buolamwini18a.pdf>

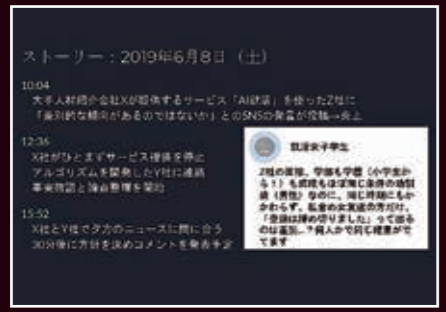


図4. 日本ディープラーニング協会の公共政策委員会メンバーで作成した「笑顔の謝罪会見! 炎上体験型ロールプレイゲーム」のストーリー説明スライド。炎上してしまったAIサービスへの対応について2陣営が交渉し、いくつかの要件においてお互いの合意を得たうえで謝罪会見を開き、炎上を乗り切るゲームである

「番じゃない?」などの声で「じゃあそれで」と決まる。また、(2)アルゴリズムと(3)人間の判断が異なると、両方ともお払い箱になるという条件もあるので、3枚目、4枚目の画像になるにつれ、アルゴリズムの中身を人間が予測して合わせようとするといった現象も出てくる。結果として、アルゴリズムと人間の判断が一致したのは5枚中最初の1枚だけだった(図1)。

# ゲ

ーム後、それぞれのグループが感じたことを振り返った。(1)アルゴリズム作成側に与えられていた画像は10枚、それも全員が同じ服を着て正面を向いた写真のみだった(図2)。ここで重要なのは、枚数の十分さではない。与えられる画像データからは服装、表情などの文脈情報がそぎ落とされていることだ。そのため(1)アルゴリズム作成側によるリストには「フード付きの黒い服」、「20代」、「笑っていない」、「黒い髪」、「普通か痩せ型」と書かれていた。(2)アルゴリズム実行側は、このリストをもとに判定を行うが、疑わしい人は「黒い服」を着ていないかもしれないし、服によっては着ぶくれしているように見えるかもしれない。ニヤニヤ笑っているかもしれないし、サンングラスや帽子が邪魔して年齢や髪の色はわからないかもしれない。時々、アルゴリズム実行側の判断に対して作成側から不満の声があがっていた。アルゴリズム作成側の意図通りにアルゴリズムが実行されていなかった場合があったそうだ。一方の(3)人間は、人を侮辱してい

あり、差別的になりうるというのが理由の一つだ。たとえばアフリカ系の女性の画像の学習が十分でないため、認識精度が落ちてしまうとの研究結果もある(図3)。ゲームが作られたカナダでも、予測システムの判断が、人間と異なるアルゴリズムは使ってはならないとの最高裁判決が2018年にでている。

# さ

まざまな課題に対して、自分事として考えるために有効なのがゲームという手法だ。筆者自身もいくつかゲームを作ってきた。たとえば、社会実装時にAIサービスが「炎上」してしまったとき、関係者間でどう対応するかというクライシス・マネジメントに関するロールプレイを、日本ディープラーニング協会のメンバーでもある工藤郁子さんと一緒に作った(図4)。ゲームを通じて、AIの社会実装を進めるにあたって必要とされる公平性(Fairness)、透明性(Transparency)、アカウントビリティ(Accountability)を担保する研究開発、信頼される技術、制度設計の在り方を考えることができる。研究結果を広める方法は論文や講演だけではない。ゲームというツールを通して、社会とAIをめぐる問題について、今後とも考えていきたい。

## ◎江間有沙

2018年度「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「人工知能の倫理」ガバナンスに関するプラットフォーム形成



楽しみながらできる身近にある地域資源の活用

# 日本でもメープルシロップが作れます！

◎ 加賀 道(トヨタ財団リサーチフェロー)

地元である宮城県鳴子温泉地域にUターンして間もなく5年となります。この冬、生まれて初めて近所のカエデの樹液からメープルシロップを作りました！子どものころから野山を駆け回っていましたが、まさか裏山の木から、あの美味しいメープルシロップが作れるとは思っていませんでした。きっと、皆さんの近くにもカエデの木が生えていると思いますので、今回はメープルシロップの作り方を紹介したいと思います。

## 【メープルシロップの作り方】



**1. カエデの木を探す：**糖度の違いはありますが、カエデ属の木であればどの種類でも大丈夫です。赤ちゃんの手のようなモミジの葉っぱが付いている木が探しやすいですが、実はいろいろな形の葉っぱがあります(調べてみると面白いですよ!)。今回は、オオモミジの木とイタヤカエデの木から樹液を採取しました。樹液の糖度が高まる2~3月頃のみ、採取が可能となります。



**2. 樹液をいただく：**電動ドリルで穴をあけます。深さは約5センチ。穴をあけると、じわじわと水分がにじみ出てきます。今回は、スパイルという専用の器具を差し込み、ホースをつなげて樹液を集めました。



**3. 樹液を煮詰める：**集めた樹液はほとんど水なのですが、飲んでみるとほんのり木の香りがして、わずかながら甘みを感じます。コーヒーのペーパーフィルターなどでゴミをろ過し、ストーブなどでコトコトと気長に煮詰めます。最終的に、なんと40分の1程度まで煮詰めると、ようやくメープルシロップの完成です。最後は焦げ付かないように木べらなどでかき混ぜながら水分を飛ばします。透明だった樹液が琥珀色に輝いています。



**4. 美味しくいただく：**今回はパンケーキを作り、そこにメープルシロップをかけていただきました！スプーン1杯のシロップの貴重さが分かった、美味しさも格別です。



**5. 穴を埋める：**1シーズン樹液を採取した穴は、埋め戻します。今回は、カエデの木で作った栓(こけし!)で穴を塞ぎました。また来年も、自然の恵みをいただきたいと思っています。

**追伸：**誰も通らない山の道に樹液採取用のタンクを設置した翌日(もちろん許可は取っています)、我が家に一本の電話があり、年配の男性の声で「あのタンクは付けただのあんたいが?(あのタンクを設置したのはお宅ですか?)」と聞かれ、てっきり叱られるのかと思いきや、「おらい(私の家)にもカエデの木があるから、タンクつけていいよー」と言われました！早速タンクを設置させてもらい、活動の輪がじわじわと広がっています。



THE TOYOTA FOUNDATION

# トヨタ財団 ジャーナル

April 2020



## REPORT



【国内助成プログラム】  
障害児の保護者を支える「かがやき手帳」を通じた支援

## 2

020年2月中旬、国内助成プログラム「そだてる助成」の枠組みで助成中のプロジェクト「障害児の保護者を支える——子育て環境に資する支え手育成と居場所作り」(代表:安藤希代子氏)の活動地である岡山県倉敷市を訪問し、「かがやき手帳を書く会

実施者養成講座修了者フォローアップ研修」に参加しました。

「かがやき手帳」とは、倉敷市と倉敷市教育委員会が共同で発行している相談支援ファイルです。倉敷市独自のスタイルで障害児の保護者が学校や園との連絡帳をもとに、子どもの特徴的な様子をピックアップして書き留めていくものです。情報を蓄積し、子どもが所属する次の場へ橋渡しする役割を持ち、幼児期から成人期につながる一貫した支援を実現するためのツールになります。

## 研

修の事例発表では、所属している事業所(児童発達支援事業所など)にて「かがやき手帳を書く会」を実施した講座受講者3名から、実施時の様子や、どのようなプロセスを経て実施に至ったか等の発表が行われました。研修には、これから「かがやき手帳を書く会」の実施を予定されている参加者もいたことから、そのかたちへ向けたアドバイスなどもありました。

「かがやき手帳を書く会」は、継続的に実施する事で初めて効果が発揮されるものです。今回の研修は講座を修了したかたが所属する各事業所において、「かがやき手帳を書く会」を実施したことで改めて感じたことや、疑問に思ったこと等を共有する場にもなっており、ワークショップでは参加者同士の活発な意見交換が行われていました。

「かがやき手帳」は障害児の保護者を支えるツールであり、重要なのは「かがやき手帳」を通じて、困難な子育てに向き合う保護者の支援者として寄り添う心を身に着けて欲しい

## INFORMATION

### 「国内助成プログラム・国際助成プログラム」 2020年度の公募がはじまりました

2020年度の国内助成プログラム及び国際助成プログラムの公募が4月1日よりはじまりました。

国内助成プログラムについては、例年9月からとっていた募集時期を今年度より4月からに変更しています。「しらべる助成」、「そだてる助成」の2つの枠組み(発信・提言助成)は社会コミュニケーションプログラムに統合)にて助成を行います。

国際助成プログラムについては、日本を含む東アジアと東南アジアの共通課題に対する「2国以上の地域実践者による国を越えた現場交流・課題解決」への助成を行います。ただし、助成領域としては、敢えて重点領域を定めずにオープンに公募することで、将来の特定課題となり得る領域の発掘を期待します。

それぞれ詳細については、本誌18ページ掲載の事業計画または、トヨタ財団ウェブサイトを「ご覧ください」。



## LFC コンポスト

### 生ごみから美味しい野菜をつくろう

本号の特集(5ページ参照)でご紹介した国内助成のプロジェクト「ローカルフードサイクリング——生ごみを野菜にかえるサービスの構築」(代表:平由以子氏)が手がけているローカル・フード・サイクリング(以下LFC)コンポスト販売についてのご案内です。特定非営利活動法人循環生活研究所では、コンポストを使った半径2km以内での食の循環を提唱しており、家庭でも気軽に始められるコンポストの製作・販売をしています。生ごみは水分が約90%を占めているため、焼却場で燃やすには環境に大きな負荷をかけることとなります。捨てれば「ごみ」になるものをごみ箱ではなくコンポストに入れるだけで、おいしい野菜を育てられる堆肥を作ることができ、環境保護活動にも貢献することができるのです。

販売されているコンポストは2種類あり、ひとつは2か月間1日300gほどの生ごみを投入できるLFCコンポスト。定期的にコンポスト基材が届き、堆肥を作ることができます。作った堆肥は家庭菜園やプランターの栄養剤として活用できるので、園芸や野菜作りが趣味の方におすすです。もうひとつは、もっと手軽に挑戦できるコンポストチャレンジ。こちらは本格的に導入する前に一度体験してみる使いきりのキットです。1日300gほどの生ごみを3週間投入して堆肥を作るのは同じですが、コンポストの容器をそのままプランターとして使うことができ、土と季節の種もセットになっているので、すぐに手軽な家庭菜園が楽しめます。

LINEを使ったLFCホットラインに困ったことや質問などを送ると、専門のスタッフが対応してくれる安心サポートも開設されています。

新しいことをはじめるのにぴったりのこの季節、皆さまもぜひこの機会にコンポストにチャレンジしてみたいかがでしょうか。

LFCコンポストや商品の詳細は、ローカルフードサイクリングのウェブサイトをご覧ください。

LFCコンポスト(ローカルフードサイクリング株式会社)  
<https://lfc-compost.jp/>



LFCコンポストとコンポストチャレンジ



家庭の生ごみをコンポストへ



生ごみが堆肥になり野菜に生まれ変わる



玄界灘に面したコミュニティガーデンを見守るシンボルとして親しまれている(P.5参照)。[Y.N.]

[編集後記]

### LAST WORD

● 約1年ぶりに岡山県の倉敷市を訪問しました。今回は倉敷市の福祉分野で活動する団体の研修に参加させていただきました。研修には、倉敷市の児童発達支援事業所などから多くのスタッフの方々が参加され、非常に熱心な意見交換が行われていました。私自身、従妹が障害者という事もあって福祉分野には以前から関心を持っていましたので、大変勉強になりました。このような熱意のある福祉分野の現場の方々が、今後も全国各地で増えていくことで、より良い社会に向かっていくのではないかと感じました。[H]

● 昨年11月にトヨタ財団にプログラムオフィサーとして仲間入りさせていただきました。ちょうど2019年度の助成プロジェクトの選定期間だったこともあり、さまざまな企画書を読ませていただきました。国内外の多彩な視点から見出されたテーマがあり、それらのプロジェクトにより創り出されるであろう新しい未来を想い描くことは、ワクワクし知的好奇心が大いにくすぐられます。また普段はお会いできない分野の専門家

の方々に、お話を聞かせていただくことができることも楽しみのひとつです。まだまだ未熟ではありますが、よろしくお願いたします。[K]

● 取材でお話を聞いて興味を持ったので、私もコンポストを始めてみました。注文してからすぐに届いたキットを早速セットし、野菜くずや愛猫の食べ残しなどを日々入れていきます。1日に300グラムも入れていたら溢れてしまうのではないかと心配していたのですが、少しずつ分解されているようで不思議と全体の分量が増えている感じはしません。また最大の懸念事項であったにおいと虫も今のところ大丈夫です。私が住んでいる自治体では生ごみ回収用の袋が有料なのですが、一人暮らしゆえ袋がいっぱいになるまでいつも時間がかかっていました。コンポストを始めからは、家の中にしばらく生ごみがあるというなんとなくいやな気持ちになっていたことが解消されてスッキリしています。皆さんもぜひチャレンジしてみてください!。[Y.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

# JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

---

JOINT [ジョイント] No.33

---

発行日 2020年4月9日  
 発行人 山本晃宏  
 編集 トヨタ財団 広報グループ

---

発行所 公益財団法人 トヨタ財団  
 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1  
 新宿三井ビル37階  
 [TEL] 03-3344-1701  
 [FAX] 03-3342-6911  
 [URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

---

編集協力 石井 泉  
 デザイン エディション・ヌース  
 印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト  
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD  
FONT

